

投稿

「天文教育」誌の今と昔

～名称・表紙・ページ数の変遷～

松村雅文（編集委員会）

1. はじめに

「天文教育」誌は、当会の定期刊行物であり、編集委員会（編集部）がその編集を担当しています。筆者は、今年の7月から、前任の作花一志氏より、編集長の仕事を引き継ぎました。編集委員会の仕事、つまり原稿を集めて編集して会誌を発行することは、編集委員全員の協力の基に行われています。この作業を行っていて、「天文教育」誌が会のメンバーにとってどのような存在であったのか、また今後どのようなことを目指して編集に臨めば良いのかなど、やや長期的な視点も必要ではないかという思いに至りました。そこで、答えが得られるのかどうかは判りませんが、バックナンバーを、改めて見直してみようと考えました。

ここで調べたものは、基本的に、手許にある過去の会誌です（図1）。私は、当会の創設期（1989年）は会員でなかった（1991年に入会）ので、初期の会誌は所有していません。しかし、1994年4月以降は、ほぼ全部が揃っていました。手許にない号については、当会の会誌のホームページ[1]を参照しました。また2005年の関東支部研究会での水野孝雄さんの発表資料[2]も参考にしました。

会誌を検討する上で、一番重要なのは、その内容であることに、疑いの余地はありません。しかし、内容そのものの検討は、必ずしも容易ではないので、別の機会に譲るとして、今回は、手始めとして、会誌名、表紙、ページ数について調べてみました。



図1 約20年分の「天文教育」誌

2. 会誌名と表紙の変遷

約20年前からの会誌を眺めて見ると、会誌の名称や、表紙の様子、綴じ方などが変化していることが判ります。そこで、それらをまとめておきます。なお、号数は、名称の変更に関わらず通算で数えられています。ちなみに、本号（2012年11月号）は119号です。

2.1 「天文教育普及研究会回報」の時代

第1号は、1989年12月発行で、名称は「天文教育普及研究会回報」でした。第1号から1993年12月号（14号）までは、製本はされておらず、ホッチキス留めでした（図2）。当時の会誌は三つ折りにされ、定型封筒で郵送されていました。

第1号が発行された翌年（1990年）から1992年までは、年3回ずつの発行でした。1994年は5回発行されています。1993年と、1995年から1998年は4回、発行されていません。



図2 左：1993年12月号(14号)の表紙と、右：1994年4月号(16号)の表紙。最初に製本されたのは15号でしたが、私の手許に見当たりません。

2.2 「天文教育」の時代

「天文教育普及研究会回報」の名称が用いられた最後の号は、1998年6月号(33号)でした。その次の同年9月号から、現在の「天文教育」の名称になっています(図3)。



図3 左：1998年6月号(33号)の表紙と右：1998年9月号(34号)の表紙。

1999年から、年間の発行数は、現在と同じ6回になっています。但し、1998年の最後の号は、11月であり、9月号からの発行の間隔は2ヶ月になっています。つまり、当会の会計年度の1998年度から、年6回の発行になっています。

表紙のデザインも、年とともに変わって

ます。1号から14号まで、つまりホッチキス留めの時代は、表紙に目次が掲載されていました(図2左)が、15号からはきちんと表紙らしい表紙がつくようになりました(図2右)。特筆すべきは、1998年11月号(35号)から2000年5月(44号)の表紙で、天文学者のポートレートが見事なイラスト(GENの署名あり)で描かれていることです。会誌のホームページ[1]でその縮小版を見ることができるので、未見の方は、是非ご覧ください。

表紙が、現在とほぼ同じスタイルになったのは、2001年9月号(52号)でした(図3)。

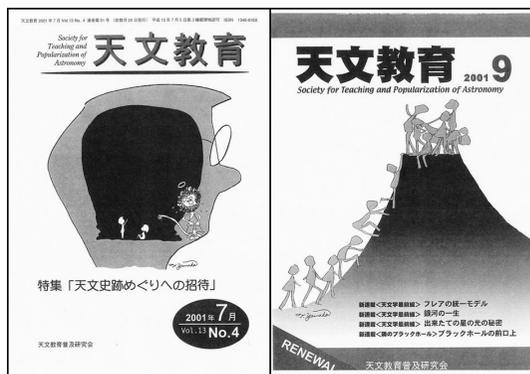


図4 左：2001年7月号(51号)の表紙と、右：2001年9月号(52号)の表紙。

2.3 時代の区分

名称・表紙・発行頻度の様子から、会誌の歴史は、次の4つの時代に区分できそうです：

- (1) 「回報」ホッチキス留め時代：1989年12月号(1号)～1993年12月号(14号)：年にほぼ3回発行
- (2) 「回報」製本時代：1994年2月号(15号)～1998年6月号(33号)：年にほぼ4回発行
- (3) 「天文教育」旧表紙時代：1998年9月号(34号)～2001年7月号(51号)：年6回発行
- (4) 「天文教育」新表紙時代：2001年9月号(52号)以降。年6回発行

(1)は3年間、(2)は4年間、(3)は3年間の期間であるのに対し、(4)の時代は10年以上も続いていることとなります。現在の「天文教育」誌は、外見的には、落ち着いていると言って良さそうに思えます。

3. ページ数の変遷

次に、ページ数の変遷を見てみましょう。手許で確認できる冊子については、印刷されている最後のページ数を用いました。手許にない冊子は、会誌のホームページ[1]に掲載されている目次から推定しました。目次には最終ページは載っていないので、数ページ程度の誤差が入る可能性があります。以下の議論には影響しないと思われます。

3.1 各号のページ数の変遷

図5は、各号の総ページ数が、発行年とともにどのように変化したかを示します。

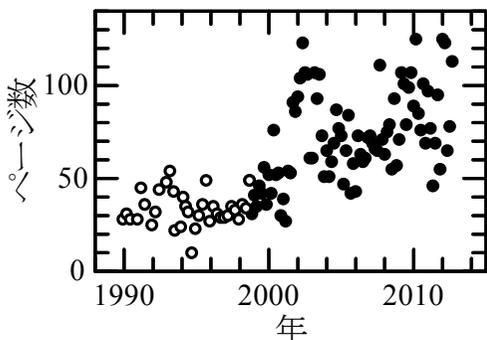


図5 各号のページ数の変化。白丸は、「天文教育普及研究会回報」、黒丸は「天文教育」。

図5を見て、まず気がつくのは、年とともにページ数が増大する傾向があることです。年代とともに、本誌は発展してきているとの解釈も可能で、まずは喜ばしいことです。

しかし、2000年の前と後の2つに分けて解釈することもできそうです。前者は、2.3

節の区分の(1)と(2)に相当し、後者は、区分(4)に相当します。そうすると、2000年以降は、ばらつきは多いけれども、あまり変わらず、ほぼ一定である、と言うことも出来そうです。

3.2 ページ数が多い号の秘密

2000年以降の会誌のうち、目立ってページ数が多い号について、何か特徴がないかと見てみました。すると、これらの号においては、充実した特集が組まれていることに気がつきました(表1)。

表1 ページ数が多い号と、その特集

年月	頁	特集
2000年5月	76	天文施設における体験学習
2002年5月	123	パブリックアウトリーチ<2>
2007年9月	111	ユニバーサルデザイン天文教育その1
2010年3月	125	世界天文年2
2012年1月	125	2011年度近畿支部会報告
2012年3月	123	2012年金環日食に向けて

これらの号には、世界天文年(2009年)や金環日食(2012年3月)など、話題性がある特集がある一方、支部会の報告(2012年1月)や、様々な教育普及活動が取り上げられている特集もあります。つまり、特集を組みにあたって、編集委員が様々な工夫を行ったことが伺われます。

3.3 ページ数の変遷 vs. 会員数の変遷

会員数は、会の規模を表す一つの数ですが、会員数と、会誌のページ数とは相関があるのでしょうか。図6は、1年間の会誌の総ページと、会員数の変化の様子を示しています。会員数は、名簿や[2]の資料を参考にしました。

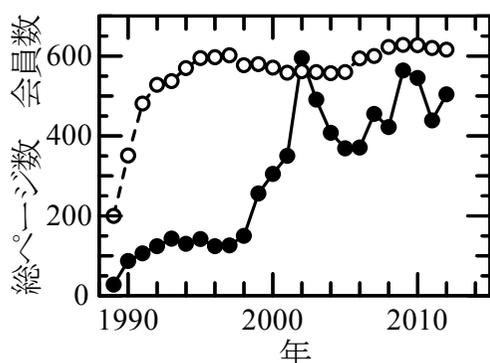


図6 年毎の総ページ数（黒丸）と
会員数（白丸）の変化

図6から、会員数は1990年代前半に急増し、1995年頃には、現在とほぼ同じ600名程度に達し、それ以降はあまり大きな変化はないことが判ります。これに対し、ページ数は、2000年頃からの増加が著しいことが判ります。つまり、会員数とページ数は、直接的な関係はないと言えそうです。

3.4 奇跡の年? : 2002年

図5、図6を見ると、2002年頃のページ数が特に多いことが目につきますが、この年は何かあったのでしょうか。会誌のホームページ[1]を見て、この年は、他の年と比べ、特に連載が充実していたことに気づきました。毎号、5本から9本の連載記事が掲載されています。2002年に奇跡が起こったわけではなく、やはり、編集委員会の企画力の結果が表れていることが判ります。

3.5 「秋枯れ」は本当だった!

作花前委員長から、11月号はページ数が減る（「秋枯れ」が起こる!）から、心して編集せよ、との話を聞いていました。疑ったわけではないのですが、実際のデータを見たくなり、1998年9月から今年の9月号までの、月ごとのページ数の平均と標準偏差を調べて

表2 「天文教育」誌のページ数

月	平均 (ページ)	標準偏差 (ページ)
1月	70.4	24.4
3月	75.9	32.9
5月	72.9	21.8
7月	71.0	19.2
9月	82.0	24.1
11月	61.5	21.3

みました(表2)。

これを見ると、確かに11月号の平均は、他よりも約10ページ以上、少なくなっていることが判ります。秋は、会員の皆さんが忙しく、なかなか原稿を書く時間がないと言った事情がありそうです。

さて、紙面が尽きてきました。今回調べて、会誌のページ数は増加傾向にあることや、その裏には、当然ではあるのですが、歴代の編集委員の色々な企画があることが判ってきました。次回の機会があれば、会誌の内容等についても考えてみたいと思います。

文献

- [1] 当会「天文教育」誌のホームページ
<http://tenkyo.net/kaiho.html>
- [2] 水野孝雄「天文教育普及研究会 これまでの20年とこれからの20年」
<http://tenkyo.net/shibu/kanto/20051120/mizuno.pdf>

松村雅文